特集 子どものことばを育てる保育

子どものことばの発達は、周囲からどのように話しかけられるかによって大きく影響を受けるといわれています。乳幼児期のことばの獲得と発達は、その後の心や知能の成長、コミュニケーション能力や人間関係を築く土台となっていきます。

そこで、今月号では子どもがことばをどのように覚えていくのか、発達に応じたことば獲得のメカニズムを探るとともに、日常の保育の場面で、子どものことばを豊かにし、コミュニケーション能力を発達させていくための保育士のかかわり方や、園便りを通した保護者への働きかけについて、インタビューなどを交えて考えてみました。また、併せて「スマホによる子育て」への問題点など、日本小児科医会の取り組みを紹介します。

インタビュー

子どものことばの発達のメカニズムに学ぶ

話し手：今井むつみ氏（慶應義塾大学環境情報学部教授）
聞き手：園田　巌氏（神奈川県相武台新日本保育園園長）

園田　子どものことばの発達は、周囲からの話しかけなどにより、大きく影響を受けるといわれています。とくに、乳幼児期のことばの発達は、その後の心や知能の成長、コミュニケーション能力や人間関係を築く土台となっていきます。

そこで、本日は子どものことばの発達についてさまざまな研究をなさっている、今井むつみ先生にお話を伺っていきたいと思います。

はじめに、先生が著書『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）に書かれている「子どもはおなかの中にいるときからことばを覚え始めている」ということからお話いただけますか。

ことばを覚える イメージとは

今井　私たちおとなにとって、子どもがことばを覚える方法には、ふたつのイメージがあると思います。

ひとつは、ペットに〝おすわり〟と教えてしつけをするように「子どもに直接ことばを教える」ことです。おとなが直接ことばを教え、間違えたら直すことを繰り返すことで覚えていくというイメージです。

もうひとつは「ことばの学習はすでにもっている概念へ対応づける」ということです。子どもが母語の単語を覚えるとき、すでにもっている概念（意味）に対して、それをさし示す音列を覚えていくことがことばを覚えることだというイメージです。

このようなイメージは外国語の学習の経験からくるのかもしれません。

外国語を学ぶときには、おもに外国語の単語を母語で知っている単語に置き換えて覚えていくこ

今井 むつみ氏

とを無意識にしています。「おはようございます」は「ｇｏｏｄ ｍｏｒｎｉｎｇ」、「犬」は「ｄｏｇ」と対応づけて覚えます。この場合、私たちはすでに「ｄｏｇ」にあたる日本語の「犬」ということばを知り、その意味を知っています。母語を覚えるときにも同じように、「犬」とか「動物」という概念をすでにもっていて、それぞれの名前の音の並びを覚えることが、ことばを覚えることとつい思ってしまうのではないでしょうか。

しかし、実際には、赤ちゃんは生まれたときには言語について何も知りません。人の声が環境の音とは違い、特別にコミュニケーションをとるための意味をもっていること、相手のいっていることを理解するためには単語に区切っていかなければならないこと、単語はそれぞれ意味をもち、そこには名詞だけでなく、動詞や形容詞といった動作、物のようすの名前、色、触った感じなどの属性や特徴などを表すいくつかの違う種類があること、このような言語についての当たり前の事実も、赤ちゃんは自分で発見しなければならないのです。

生まれる前から発見は始まる

今井　言語を発見していく旅はおなかの中から始まります。赤ちゃんは、生まれる前は羊水の中にいるので、細かい、一つひとつの音までは聞こえません。リズムと音の高低がわかる程度です。聞こえてくる音の高低、リズムの刻み方、抑揚は、日本語、英語などそれぞれの言語によって違います。たとえば日本語の環境で生まれた赤ちゃんに、日本語と、全然聞いたことがない外国語を聞かせると、赤ちゃんは日本語をもっと聞きたいという反応をみせるということもわかっています。

ことばを区切り、単語の意味を考え始める

今井　ことばを覚えることは単語の意味を覚えるところから始まると思いがちですが、赤ちゃんはその前に、単語を発見しなければなりません。耳から入ってくる声はつながっています。そこで、赤ちゃんは、耳に入ってくる声を一つひとつの単語に区切らなくてはいけません。ここで手がかりになるのが、リズムとイントネーションです。人の声はリズムをもっていて、ことばを話すとき、多くの場合文の区切りと対応しています。お母さんのおなかの中で聞いていた、自分の母語のリズムやイントネーションのパターンがここで役に立ちます。また、単語をつくる音の単位は言語によってそれぞれ違います。赤ちゃんは自分の母語で単語をつくるための音の単位も自分で発見するのです。そして、だいたい一歳の誕生日ぐらいまで

園田 厳氏

には、声を単語に区切ることができるようになっていきます。

声を単語に区切ることが上手にできるようになると、単語の意味も考え始めます。でも、辞書も引けないし、知っている単語がほとんどない赤ちゃんは、知らない単語の意味を別の単語で言い換えるなどして、ことばで教えてもらうことはできません。自分で考えるしかないのです。たとえば、目の前の一個の丸いりんごを指さしてお母さんが「りんごを食べましょう」といったとします。でも、その指さしだけでは、丸ごとのものだけではなく、切って皮をむいたものも「りんごであること」、でも、果物のバスケットに一緒に入っているバナナやミカンは「りんご」でないことは、わかりません。

それでもりんごやミカンのような、物の名前は比較的わかりやすいのですが、動詞の意味を指さしから推察することはもっとむずかしいのです。たとえば「歩く」という動詞は、おとなが歩く、よちよち歩きの赤ちゃんが歩く、高齢者がつえをつきながら歩く、犬や馬が歩くなど、さまざまな状況のなかで使われています。さらに同じ動作を表すことばでも、「歩く」が「走る」や「跳ぶ」とどのように違うのかを理解しなければ「歩く」という単語を使うことはできません。

つまり、動詞の意味は、「歩く」のような具体的な動作の名前でも抽象性が高く、見ただけですぐにその意味の範囲を決めるのはおとなでもむずかしいのです。

むずかしい動詞を子どもが覚えるには何が有効でしょうか。私が以前保育園に伺ったときに、保育士さんがうがいをすることを「グチュグチュじゃなくて、ガラガラッペッてしようね」と子どもたちに話しかけている場面をみて、とてもわかりやすい表現だなと思いました。

子どもといつも接しているおとなは自然と「パンパン」「チョキチョキ」というオノマトペを使って動作を表すことが多いですが、それは、普通の動詞では子どもがよく理解できないことを直感的にわかっているからなのでしょう。

ことばの言い間違いは発達の過程

園田　ことばは覚えるとか、教えるものではなくて、子どもが主体的に能動的に発見をしていくものだということですね。保育士はそういうところにも携わっていく仕事ですが、たとえば子どもがことばの使い方を間違ってしまったり、ユニークな表現をするような場面で、まわりのおとなは具体的にどのようにかかわればいいのでしょうか。

今井　子どもの月齢にもよると思いますが、二、三歳の子どもは結構言い間違いもします。そういうときにとくに直す必要はありません。むしろ、それをきっかけにして、おとなは子どもに合わせて話

を続けていけばいいと思います。おとなが誤りを正そうとしても、子どもが納得しないと直りません。ことばを聞いたり話したりすることを通してことばを学ぶ経験を積むと、「あれ？　先生がいっていることは、何か自分が思っていることとは違うな」と自然に自分で気がついて直していきます。

とにかくことばを教えなくては、覚えさせなくてはということではなくて、子どもの目線で子どもと一緒にたくさん話をする、そのことがとても大切です。

「システム」をつくりながらことばを理解していく

園田　先生の著書に、単語だけを切りばりして意味をくっつけるだけではことばの理解をすることはできず、子どもの発達のなかで、語彙は「意味のシステム」として確立していくと書いてあります。そのあたりの話を少しお聞かせいただけますか。

今井　一つひとつの単語、たとえば先ほどの「歩く」ということばを理解するためには、「歩く」ということばを覚えるだけでは理解できません。「歩く」と「走る」など動作を表すことばそれぞれが、どのように関係づけられているのか。どこが共通していて、どこが違うのか。そうした「意味のシステム」を子どもがつくって覚えていかないと言語を使うことはできません。ただ、そういうのは簡単ですが、ゼロから学ぶ子どもの立場になって考えてみると、それは非常にむずかしいことです。「歩く」というひとつの単語をきちんと使えるようになるためには、「歩く」「走る」「跳ぶ」などの関係する単語を全部知ったうえでそれぞれの単語を地図の上に位置づけた「意味の地図」を作らなければならないということに他ならないからです。しかし、知っていることばが非常に少ない小さい子どもにとって、それは無理なことです。子どもはどのようにして、その無理なことを可能にしているのか。色のことばをどのように覚えていくのかを例に考えてみましょう。

子どもは色であそぶのは大好きですが、色の名前を覚えるにはかなり苦戦します。子どもにとって覚えやすい色と覚えにくい色があって、覚えやすい色から覚えていきます。覚えやすい色は、わりと頻繁に名前を聞く色です。それから赤色や黄色などのはっきりした色は覚えやすく、茶色や灰色などは、三歳ぐらいでもほとんど知りません。灰色ということばがあることは知っていますが、それがどの色をさすのかまでははっきりわかりません。赤、黄、青以外のよくわからない色が灰色だと思っているのかもしれません。

色も動きのことばと同じように、色の語彙全体の地図の中で、それぞれの色がどの部分をさすのかがわからないと、その色の名前を理解できたことにはなりません。「赤いシャツ」といっても、「赤」を知るためには、赤と紫の違いとか、赤とオレンジがどのように違い、日本語の色の語彙全体の地図（システム）のどこで線引きがされるのかを覚えていかなければならないのです。日本語と英語の色の語彙はわりと似ています。しかし、外国語には色の名前が五つぐらいしかないような言語もあります。そうすると、言語のシステム自体が全然違います。

母語のシステムを覚える場合、子どもはことばのマップを自分で作る必要があります。最初、虫食いだらけの地図作りから始めて、とにかく新しいことばを聞くと地図に入れてみる。そうすると、その単語を覚えるだけではなく、その単語に関係する単語の意味も一緒に考えます。そうして、徐々に母語のシステムを覚えていくのです。

園田　そのシステムのなかでどんどんことばを獲得していくときに、においなどいろいろな要素が入ってきます。それがまた想像力を生み、感情表現につながるということですね。では、「かわいい」「かわいそう」など感情的な心の動きを子どもがことばとして取り込んでいく過程には、何か特別なことがありますか。

単語の周辺の情報から多面的なことばを

今井　ことばには目に見えない概念がたくさんあります。「好き」や「悲しい」などの感情のほか、さまざまな抽象的な概念もあります。もともと喜びや悲しみなどの感情はことばに先立ってあるのですが、ことばを覚えることでそういう感情をより具体化していくということはあるかもしれません。

ことばによってある文を作るときは、主語、動詞、目的語があり、その主語には自分だけではなくて、自由に主語になる人を入れ替えることができます。だから、自分が何をしている、何を考えているということだけではなく、自分の話している相手、見ている世界、そこでお友だちが「○○をしている」ということを話す。また、言語というのは多面的で、ひとつのことをいろいろな言い方でいうことができます。それは、さまざまな視点からみることができるようになることを助けると思います。

人間の大事なところは、自分だけの固定的な見方ではなくて、いろいろな見方ができることです。ほかの人の心も考えるし、相手の立場がわかる。自分を主語にする文だけでなく、相手や第三者を主語にした文を聞いたり、いったりすることがその気づきにつながるのかもしれません。言語を覚える過程で、社会的な他者との関係というのも築いていくのではないでしょうか。

園田　東京女子大学の柏木惠子先生の著書に、赤ちゃんのことばは、幼児期になると人間関係や社会性が色濃く反映されるようになってくると書かれていました。たとえば、お父さんは仕事に行っていて、お母さんと一緒に動物園に行ってパンダを見てきたとき、子どもはお母さんに「パンダいたね」という。お父さんには「パンダいたよ」という。言語的にいうと、「ね」と「よ」しか違いません。しかし、全体的な状況とか、人間を理解したうえで、子どもは自然と使いわけているのですね。

質のよい言語の環境をつくっていく

今井　先ほど、言語は、単語が意味の単位になるといいましたが、単語の外にあるそれ以外の情報もすごく大事です。園田先生がおっしゃった「ね」と「よ」の違いとか、あるいはイントネーションの違いなども、子どもがことばを使いこなすために学ばないといけないこ

とです。「ね」「かな」「よ」など、助詞の使い方で、話者の気持ちがどのように反映されるのかを学ぶことも、言語の学習のなかで非常に大事なことです。

　このようなことばの言い回しから、その背後にある話し手の意図や気持ちを推し量ることは、三歳くらいでもむずかしいといわれています。この気づきを促すには、やはり子どもが話を聞き、自分でも発話をする経験を積むしかありません。

　先程、言い間違いを直さなくても自然に直るといいました。でも、普通の範囲で発達している子どもでも、質のよい語りかけなど言語の環境をつくることが非常に大事ですし、そのような環境の有無が子どもの語彙力や言語の運用能力に大きな影響を与えます。

　たとえばアメリカでは、教育に関心をもち子どもをよい環境で育てようと考える中産階級以上の親は、子どもに対してたくさん話をします。赤ちゃんに関心をもって対話したいと思いながら語りかけていると、自然と赤ちゃんが理解しやすいように、一つひとつのことばをゆっくりとはっきり話し、抑揚を強調するようになります。一方で赤ちゃんと対話しようという気持ちがあまりないと、おとなに対する話し方のようになってしまいます。まったく理解できないことはないと思いますが、やはり理解の度合いが違ってきます。

　言語の能力はある意味で積み上げていくものなので、子どもがいろいろな発見や分析をして学んでいくときに、よい材料をどれだけ豊かに提供するかが、ことばの発達にとってとても大切なことなのです。

　また、発達障害や自閉症など障害のある子どもたちには、積極的に支援をする必要があります。しかし、支援の仕方としては、やはり教えることはできないので、気づきを促すようさらに手厚くコミュニケーションをとることが大事です。

大切にしたい子どもとのキャッチボール

今井　ことばを覚えることによって、数の概念、動物や植物をはじめとした自分をとりまく自然や出来事についての知識など、いろいろなことを子どもは一緒に覚えていきます。ことばの発達というのは、単にことばをどのくらい知っているかとか、おしゃべりが流暢にできるかとか、そういうことだけにとどまりません。

　子どもの目を見ながら、子どもに合わせて対話をしていく。そのとき、子どもがすぐに自分のいったことに反応せず、とんちんかんな応答をしてきた場合でも、イライラせずに、理解できるまで待ってあげる。そうした態度も大事だと思います。

　お茶の水女子大学の内田伸子先生の調査でも、「○○をしなさい」といった命令ばかりする親の子どもと、子どもの目線に立って一緒に何かをする共同作業型の態度の親の子どもとを比べると、共同作業型の親の子どものほうが言語発達や知能の発達も優れていたということが報告されています。

　ことばを自分のものにするためには、たとえば絵本を読むときにも、字やことばを覚えさせることを目的にするのではなくて、それをきっかけにして、とにかく子どもとたくさん話をして、子どもが

親や保育士と直接対話するなかで、いろいろな感情や気持ちを共有することが必要なのです。そして、それは、決してDVDなどでは学ぶことができないと思います。

園田　一方的に語りかけるのではなくて、子どもの目線に合わせて、気持ちを通じ合わせながらというと、必然的にそれは応答的なかかわりになる、命令形は一方通行なので、ことばの発達に大きく差がつくということですね。

　これは私たち保育関係者にもいえることで、ただたくさんのことばをかけるだけでなく、上質な声かけが大切ということでしょうか。そのためには、気持ちと気持ちが通じ合う、キャッチボールのようなかかわりの重要性についてきちんと押さえる必要があります。

代用ではなく、子どもと一緒に話すきっかけとして

園田　それと関連しますが、スマートフォンの普及など社会環境が様変わりするなかで、それが子どものことばに与える影響について先生のお考えをお聞かせください。親の間で「鬼のアプリ」がはやっていて、子どもが食べない、寝ないなどいうことを聞かないときに、親がしかるかわりに「寝ない子は誰だ」というアプリを見せると、子どもは怖がってふとんに入る。それでいいのかと、私たち保育関係者は疑問をもっています。

今井　私もとても心配しています。最近、電車の中などで、多くの親御さんがスマートフォンを眺めていて、赤ちゃんとあまり目を合わせていないのを頻繁にみかけます。赤ちゃんにとって、目と目を合わせた語りかけやことばの応答がどれだけ必要かということを、子どもの保護者や養育にかかわるかたたちに伝えていかなければならないと思います。子どもがおとなに理解できることをいうことができるようになるのは一歳を過ぎた頃ですが、その前から、赤ちゃんに語りかけることは、非常に大事なことです。

　それと、スマートフォンのアプリなどを使うのなら、親が「しかる」ことの代用をさせるのではなくて、自分も一緒にそれを見ながら子どもと話すことが必要です。アプリやテレビなどの映像による一方的なメッセージは、目と目を合わせた生の語りかけの代わりには絶対になりません。

　今の世の中、いろいろな道具ができて便利にはなりましたが、子育てでは、効率化ということばはなじまないと思います。保育士さんでも、学校の先生でも、どうしたらよりよい保育や教育ができるのかを考えて、そこで時間と努力を厭わない人が人よりも抜きんでた一流の職業人になっていると思います。

　親も仕事など子育て以外にも大切なことはたくさんあると思います。しかし、忙しい時間のなかで、どこかを効率化して時間を短縮していくことは大事なことですが、子どもとの時間の過ごし方は効率化せず、その時間を確保するためにほかのことを効率化して時間をつくっていただきたいと思います。

園田　本日のお話で印象に残っていることは、子どもが受動的な存在ではなくて、とても能動的で、生きる力を自分で獲得しようとし

子どものことばを育てる保育・環境づくり

～子どもと保育士・保護者とのかかわりの視点から～

白梅学園大学子ども学部教授　増田　修治

ているということです。ですから、私たち保育者は教え込むのではなくて、発見、気づきを促す役割を果たしていくことが必要だとあらためて感じました。

今井　そのためにも親御さんや保育士の皆さんには、子どもの発達に合ったよい材料をできるだけたくさん提供することをお願いしたいのです。それはそんなにむずかしいことではありません。子どもをずっとみて、コミュニケーションをとろうという気持ちがあれば、自然とできることです。ここでいうよい材料というのは物質的なことではなくて、語りかけ、環境などです。たとえばたくさんの絵本を与えて、ただ見なさい、読みなさい、といってもだめで、おとなが一緒に見ながら話をすることを大切にしてほしいと思います。

園田　目を見ながら話す、能動的に語りかける、それが広い意味での材料を豊かにするということですね。

近年、保護者に対して誤解のないように伝えようとして、ことばにことばを重ね、理屈に理屈を重ねて、だんだん子育てが理屈っぽくなってしまって、それがまた保護者の負担になるという悪循環を感じることがあります。もうちょっと気持ちとして伝わればいいなと思うことがあります。

まだまだ我われもことばについて勉強しないといけないですね。先生、本日はありがとうございました。

命令言語に囲まれている子どもたち

小学校三年生の男の子が、学校からの帰り道、自動車と少し接触して転んでしまいました。そのときに手のひらをついたので、少しすりむいてしまいました。家に帰ってそのことをお母さんに話したところ、「あんた、バカね。何やってるの。いつもボケボケしてるからよ」と二時間怒られました。

その翌日に、その男の子は次のような詩を書いてきました。

本当に言われたかったこと
S男（3年生）

ぼくはきのう、
学校からの帰り道で
自動車と少しぶつかって
手のひらを
すりむいてしまいました。
それをお母さんに言ったら、
「あんた、バカね。
なにやってるの。
いつもボケボケしているからよ」と
二時間怒られた。
ぼくは、
「大丈夫？」と言われたかった。

また、「お父さん・お母さんの口ぐせ調査」をしたことがあります。第一位は「明日の用意したの？」で、なんと八一％でした。そのあとは、「早く寝なさい」「早くしなさい」と「早く〇〇しなさい！」ということばが続きました。なかには、「なにものなの？」ということばをいっていたのが、一五％でした。「あなたの子どもでしょ！」といいたくなってきますよね。

こうした現状から考えられることは、子どもたちが「命令言語」に囲まれているということなのです。おとなは、忙しいなかで追いまくられてしまい、ついつい「命令ことば」で子どもを動かそうとしてしまいます。しかし、子どもたちが情緒豊かに育つためには、「命令ことば」ではなく「感情言語（情緒言語）」が大切なのです。このS男君が書いた詩のように、「大丈夫？」とか「ケガはない？」などといった子どもの思いによりそう「感情言語」こそが、子どもの心を育てるのです。

小学校でも、子どもたちがよく物を壊すことがあります。とくに、サッカーボールなどを蹴って窓ガラスや入り口のガラスを割ってしまうことがあります。そんなときに大事なのは、まず怒ることではありません。みんなにケガがないかを心配することです。まずは、「ケガはない？」とガラスのそばにいた子どもたちのようすを確認し、それからボールを蹴った子にも「ケガはなかった？」と声をかけます。すると、「怒られる」と覚悟していた子どもは、素直に謝ってくれるのです。

そこで、「誰がやったんだ！」と声を荒げると、「〇〇ちゃんだよ」とか「△△だよ」といった、人に責任を押しつける言動が出てくることが多いのです。まずは、心配をし、子どもによりそった「感情言語」をかけること。これが、子どもの心を成長させ、他者にやさしい子どもに育てるのです。

子どものことばを発達させることばかけとは？

（一）子ども同士の豊かな会話を広げるための保育士のあり方